

現代に生きる中・高校生のための日本漢詩・日本漢文の教材化(2)

富永 一登 朝倉 孝之 岡本 恵子 佐藤 利行

はじめに

昨年度報告した¹⁾ように、戦後の教科書に収められた日本漢詩教材は、当然と言えば当然ではあるが、指導要領との関係が如実に反映されていた。とりわけ「国語Ⅰ・Ⅱ」の時代には、日本漢詩は教科書からほとんど姿を消し、日本文学との関連に限ってわずかに命脈を保ったにすぎない。それが現行指導要領になって「古典」の内容の取扱いの中で「教材には、日本漢文も含めるようにすること」という文言が加わったためもあるか、再び採られるようになった。

とはいえ「古典甲・乙」の時代、あるいはそれ以前と比較すると、作品、作者ともに変化があり、量的にも比べものにならない。変わらず採られているのは、菅原道真「不出門」、菅茶山「冬夜読書」、広瀬淡窓「桂林荘雑詠」、頼山陽「泊天草洋」等であり、新登場と言えるのが正岡子規「送夏目漱石之伊予」である。

それにしても、今、日本漢詩の教材的価値をどう考えればよいのか。今年度は現場での授業実践を通して、日本漢詩の教材的価値を問い直してみることにした。

入門期には、中学校でも高等学校でも、漢字、漢文の伝来や故事成語を学習することが多い。文字を得た日本人は、漢文で記録し、漢文で思考するようになった。日記も漢文で書き、心情を漢詩で表現したり、社交の具にも用いた。仮名も漢字があって生まれたものである。漢文がいかに日本人に大きな影響を与えたか、その認識から、多くの場合、漢文学習は始まる。

とはいえ、こうした学習は、生徒たちにはまるで昔話である。その点から言えば、外来文化の受容であると同時に日本的感性の創造でもあった日本漢詩は、生徒に日本文化の在りようの一端を見せてくれるのではなかろうか。

日本漢詩が真に日本漢詩として結実したのは江戸時代である。本稿ではまず、そこから論を起すことにする。

1. 江戸漢詩に見られる日本意識

江戸時代は、日本漢詩の全盛期である。特に、荻生徂徠(1666—1728)などによって日本の漢学が独自の発展を遂げた元禄年間以降、盛んとなり、江戸後期においては、俳句と同様に普及した。刊行された漢詩集だけでも数千点、手稿のものも含めて集積すればその数は計り知れないものがある。

日本における漢詩の盛行は、勅撰の三漢詩文集『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』が編集された九世紀初めの平安時代、南北朝から室町にかけての五山文学の時代、そして江戸の後期であると言われる。中でも、江戸後期は作者の裾野が武士から町人にまで大幅に拡大し、菅茶山(1748—1827)のように、農家に生まれた詩人も現れ、日本漢詩が独自の文化として形成された。

これは、漢学の普及と関係している。室町時代までの漢籍の読者は、朝廷貴族・五山の僧侶・一部の武士などに限られていたが、江戸時代になるとその層は、武士全般や町人にまで拡大した。徳川家康は、武士を中国の学問の担い手だった「士大夫階級」とし、君臣関係の思想的な安定を図ろうとして、幕府の官学に朱子学を採用した。これによって日本で始めて儒学の実践が行われるようになる。それが、漢文訓読の技術、相次ぐ漢籍の出版、漢籍の読者層の拡大につながり、漢語の使用、中国古典の知識が一般化し、日本語による表現文化にとって漢文の力が必要不可欠なものになっていく。また、諸大名なども競って漢籍の講読をはじめようになり、地方文化の中でも漢籍を通して漢文の素養が広まっていった。

しかし、明治以降、この江戸後期の漢詩は、平安の漢詩文・五山文学に比して、日本文学史上では、ほとんど取り上げられなかった。それは、欧化主義による、漢文よりも西欧語を、ナショナリズムの昂揚による、漢語よりも母国語である日本語をという風潮の中、明治に始まる文学史の著述が、西欧の文学史観に基づくものであったことに起因する。中村真一郎氏(『江戸漢詩』、岩波書店、1985年)は、これを「文学史の近代的

歪み」と言い、「明治維新の理念的及び現実的な結果」
「日本人を縛っていた普遍的な中国の世界帝国文化から、自分たちを独立させる、そして母国語である『日本語で考え歌う』という強い欲求」、「各民族がそれぞれの国語で書いた作品だけを、歴史的に配列して概観するという、ナショナリズムの所産」だと指摘する。結果、勅撰漢詩集以外の日本漢詩は、日本文学とはみなされなくなったのである。

ところが、江戸の漢詩人たちは、自作を中国文化の亜流と考えていたのではなく、その時代の日本に生活する者として自己の思想・感情を表現し、漢詩を日本独自の文化としていたのである。以下、その一端を試みよう。

1) 荻生徂徠の『訳文筌蹄』題言

荻生徂徠は、中国古典を読解する古文辞学を確立した学者であるとともに、五代將軍綱吉の側用人の柳沢吉保や、八代將軍吉宗の政治的助言者でもあった。赤穂浪士の処分裁定で、私義切腹論を主張して、「徂徠擬律書」を上申し、採択されたことでも有名である。

一七一五年に刊行された『訳文筌蹄』は、漢語の微妙なニュアンスを日本語に的確に訳出するための手引き書として著述されたものである。その題言には、中国古典を学習するための手順や、一字一句の読解の重要性が詳細に記されていて、徂徠の言葉へのこだわりがうかがえる。徂徠は、長崎の唐通事から中国語を学んでいたので、中国古典の学習には、中国語を習得することが最上乘とし、「学者先務、唯要其就華人言語、識其本来面目。」(学者の先務、唯だ其の華人の言語に就きて、其の本来の面目を識らんことを要す。)と言う。そして、「而其本来面目、華人所不識也。豈非身在廬山中故乎。」(而して其の本来の面目は、華人の識らざる所なり。豈に身 廬山の中に在るが故に非ずや。)と言うところには、中国の人の知らない中国古典の本来の意味も分かるのだという自負さえ感じられる。

中国語を習えない人は、第二等の方法として訓読によらざるを得ないが、その場合、耳や口では中国の人に及ばないのだから、目と心で和語と華語の違いを理解し、「眼光 紙背に透る」ことによって始めて訳の真正なものを得ると言う。

徂徠には、漢学を自国の学問としていく自負が見られ、実際、彼の『論語微』などの著作や漢籍の読解は、中国の学者たちをも驚嘆させている。

徂徠の高弟の太宰春台(1680—1747)は、徂徠の教えを『倭読要領』(一七二八年刊)に著し、漢学専攻者のための漢文訓読の方法論を示して、訓読技術の普及に貢献している。また、同じ高弟の服部南郭(1683—

1759)は、『唐詩選国字解』(講義録が写本として流布し、一七九一年に刊行された)を著すとともに、詩作活動を通して、後世に影響を及ぼした。

2) 広瀬旭荘の「題大槻磐溪詩集」詩

広瀬旭荘(1807—1863)は、兄の淡窓とともに江戸後期を代表する漢詩人で、日本漢詩集『東瀛詩選』を編集した清・兪樾に「東国詩人の冠」と評され、最多の175首が採録されている。長編の古詩が多く、漢詩のほかにも、日記『日間瑣事備忘』、『九桂草堂隨筆』、『明史小批』、『塗説』などの著述があり、筆量豊かな文人であった。また、旭荘は、江戸や大坂で塾を開き、文人たちとの交流の幅も広く、1200余首を収録する詩集『梅墩詩鈔』には、それを物語る詩が多く見られる。「大槻磐溪詩集に題す」詩(『梅墩詩鈔』四編卷一)もその一つである。

弘化三年(1846)、四十歳の作。大槻磐溪(1801—1878)は仙台藩の儒者で、江戸にいたときの友人である。

- 1 古来文人多相忌 古来 文人 多く相忌む
- 2 不然相替互諂媚 然らずんば相替め互ひに諂媚す
- 3 吾題磐溪詩 吾れ磐溪の詩に題するは
- 4 不敢貢諛況敢刺 敢へて貢諛せず 況んや敢へて刺らんや
- 5 管論吾邦勝支那 管て論ず吾が邦の支那に勝るは
- 6 不独皇統万年無替墜 独り皇統万年 替墜する無きのみならず
- 7 富岳白雪柱蒼穹 富岳の白雪 蒼穹に柱し
- 8 天橋松島更奇異 天橋 松島 更に奇異なり
- 9 芳野山桜月瀬梅 芳野の山桜 月瀬の梅
- 10 十里如雲別天地 十里雲の如く 別天地なり
- 11 加之湖水有琵琶 之に加ふるに 湖水に琵琶有り
- 12 瀑布有那智 瀑布に那智有り
- 13 求諸西土名勝中 諸を西土の名勝中に求むるに
- 14 雖偶有一恐無二 偶たま一有りと雖も 恐らくは二無からん
- 15 下及海參松魚及年魚 下 海參松魚及び年魚に及んでは
- 16 棘鬣之味尤脂膩 棘鬣の味 尤も脂膩たり
- 17 万物元氣發為文 万物の元氣 發して文と為り
- 18 当有才人礪礪落落拔其萃 当に才人の礪礪落落として其の萃を抜く有るべし
- 19 我聞文章經國之大業 我れ聞く文章は經國の大業
- 20 不朽之盛事 不朽の盛事なりと
- 21 然而作者寥寥如晨星 然れども作者 寥寥として晨星の如く
- 22 若遇西人逡巡三舍避 若し西人に遇はば逡巡して三

舍を避く

- 23 百余年来豪傑徒 百余年来 豪傑の徒
 24 扼腕仰棟彈神思 扼腕 仰棟し神思を彈す
 25 欲逐陶謝李杜參朝翔 陶謝李杜を逐ひ参じて朝翔せんと欲するも
 26 汗流走僵難得遂 汗流れ走り僵れて遂ぐる事得難し
 27 千古遺憾莫甚焉 千古の遺憾 焉より甚きは莫し
 28 吁嗟吾知病所自 吁嗟 吾れ病の自る所を知る
 29 田舎之人寡見聞 田舎の人は見聞寡く
 30 腹乏書卷欠鍊綴 腹に書卷乏しく鍊綴を欠く
 31 都会之人半售文 都会の人は半ば文を售り
 32 唯願少勞而多利 唯だ願ふ勞少くして利多からんことを
 33 是故二十八言四十言 是の故に 二十八言 四十言
 34 此外難復加一字 此の外に復た一字をも加へ難し
 35 独感磬溪之撰異時人 独り感ず磬溪の撰は時人に異なり
 36 其才横逸力最肩 其の才は横逸し 力は最肩す
 37 托興已雄快 興を托すること已に雄快にして
 38 取材更具備 材を取ること更に具備す
 39 無情不発揮 情として發揮せざるは無く
 40 無景不写出 景として写出せざるは無し
 41 寸心秉擒縦 寸心 擒縦を秉り
 42 万象就呼試 万象 呼試に就く
 43 雅俗細大悉兼綜 雅俗 細大 悉く兼綜し
 44 殆為化工洩深秘 殆ど化工と為りて深秘を洩らす
 45 或道豪放有余雖亞韓 或るひと道ふ 豪放 余有り韓に亜ぐと雖も
 46 深婉不足亦相類 深婉 足らざるも亦た相類すと
 47 余曰否不然 余曰く 否 然らずと
 48 物宜有序次 物 宜しく序次有るべし
 49 試看近人詩 試みに看よ 近人の詩
 50 形容嬌惰精神萎 形容 嬌惰にして精神は萎えたり
 51 譬如宴安花柳人 譬へば花柳に宴安する人の如し
 52 唯須大声一喝覚其睡 唯だ須く大声一喝して其の睡りを覚ますべし
 53 金以克木火克金 金は以て木に克ち 火は金に克ち
 54 靜至無靜是本意 靜つて 靜ひ無きに至る是れ本意
 55 況君強壯未艾者 況んや君 強壯にして未だ艾者ならざるをや
 56 他日所臻超出乎此位 他日 臻る所 此の位を超出せん
 57 齧蹠奔逸千里駒 齧蹠 奔逸す 千里の駒
 58 變為称徳之良驥 變じて称徳の良驥と為らん
 59 劈雲坼石大礮声 雲を劈き石を坼く 大礮声も
 60 化為鸞歌与鳳吹 化して鸞歌と鳳吹と為らん
 61 偃武講文詩道亨 武を偃せ文を講せば詩道亨り
 62 逆取順守詩国治 逆取順守せば詩国治まらん

63 二編三編又四編 二編三編又た四編

- 64 愈變愈進愈純粹 愈いよ變じ愈いよ進み愈いよ純粹ならん
 65 終与東方風土精華恰相称 終に東方の風土の精華と恰かも相称ひ
 66 足使西人皆感愧 西人をして皆感愧せしむるに足らん

日本の風土からして文才ある詩人が現れ、すぐれた詩文が作られるはずだが(第5句～第18句)、そうっていない漢詩の現状を批判し(第19句～第34句)、大槻磐溪に対する期待を述べて(第35句～第66句)結んでいる。第1句と第19・20句は、中国文学史上において、文学の価値を称揚し、文学の独立宣言とも言われる魏・文帝(曹丕)の『典論』論文(『文選』巻52所収)の「文人相軽んずるは、古よりして然り」「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」を踏まえており、日本漢詩の独自性を主張することへの意気込みがうかがえる。

第7句から第18句では、富士の白雪・天の橋立・松島・吉野の桜・月ヶ瀬の梅・琵琶湖・那智の滝などの中国にない名勝や、なまこ・かつお・あゆなどの海産物を挙げて、日本の特有性を誇示し、それがすぐれた詩にならないはずがないという。そして、最後の第66句「西人をして皆感愧せしむるに足らん」では、中国の人を感動させ恥じ入らせる作品ができることを述べている。大槻磐溪への期待感の表明ではあるが、それは旭莊の日本漢詩に対する自負があつてこそ言えるものだと思われる。だからこそ、詩人が少なく、中国の人に会えば尻込みしてしまう意気込み不足(第21・22句)、陶淵明・謝靈運・李白・杜甫を追いかけて乗り越えられないことへの遺憾な思い(第25句～第27句)、見聞の少なさや売文的な作詩態度に対する批判(第29句～第34句)、なまめかしく精神が萎縮している近時の人の詩への一喝の必要性(第49句～第52句)を記しているのである。

なお、この詩は『東瀛詩選』にも採録されていて、第39・40句の削除など、愈樾が修正したと思われる箇所が見られる。その点については、郭穎『東瀛詩選』における愈樾の修改—広瀬旭莊の『梅墩詩鈔』との比較を通して—(広島中国文学会『中国学研究論集』第16号、2006年3月)に詳しい。

言葉は情感を伴ってこそ身に付くものである。漢字・漢語を自国の文化とし、漢詩の創作を通して言葉を自分たちのものとしていった江戸漢詩人の文学的営為を知ることは、現代に生きる我々が国語の力を増す上で貴重なものと言えよう。

明治維新のナショナリズムによって、中国文学の潮流とみなされた江戸漢詩は、実はナショナリズムそのものなのである。先に取り上げた広瀬旭莊の詩を見れば明らかであろう。しかし、国語の教材の中で、日本漢詩を取り上げるのは、ナショナリズムの昂揚をはかるためではない。藤原正彦氏が、「日本人一人一人が自然への繊細な感受性、自然への畏怖、ものあわれ、なつかしさ、などといった情緒を身につけ、論理や合理の他にも大切なものがある、ということの世界に発信し教えていくことが求められる。これこそが日本人が今後果たしうる、最大の国際貢献と思う。成否は国語にかかっている。」^{注2}とされるとおり、国語の古典教育の一つとしてである。真の国際化は、まず自国の文化を知り、相手への理解を深めることによって実現可能となる。己を知らずにただ上っ面の調子を合わせているだけの友情が真の友情ではないと同様なのである。

ただ、江戸漢詩の研究は、緒についた段階である。今後、更に江戸の詩人がどのように自分たちの情感を言葉としてはめ込んでいったのか、より多くの詩の中から教材化するにふさわしい作品を選択し、詩の一字一句を詳細に検討していくということが必要となる。

2. 現行教科書教材による授業実践

漢詩の創作を通して言葉を自分たちのものとしていった江戸漢詩人の文学的営為、中国漢詩の模倣でなく、自国の文化としての日本漢詩を学習するという立場から、教科書教材中の菅茶山詩を選んだ。さらに下って文明開化を経てなお精神生活に根ざした観のある日本漢詩という立場から明治時代の正岡子規の詩を学習することとした。

以下、各詩について、2人で行ったそれぞれの授業実践を並記する。あえて事前の打ち合わせをせず、それぞれ独自の立場から実践を行い、爾後にその結果を突き合わせることにした。

1) 菅茶山「冬夜読書」詩の場合

(「高等学校古典漢文編」第一学習社による)

【実践1】(於 漢文教育研究大会)

日時 2006(平成18)年12月8日(金)2時間目

対象 広島大学附属高等学校Ⅱ年2組

(男子22名 女子19名 計41名)

教材観

日本文化の豊かな一側面が伺える日本漢詩としてどのような作品がふさわしいか。まず、日本の風土を背景にした、生活に根ざした詩であること、難解な表現や難しい漢字の少ない作品であることだろう。

その点、「冬夜読書」は、墨絵のような、いかにも日本的な情景が印象に残る作品である。また、典故を踏まえながらも気負いのない穏やかな読みぶりも感じられる。県内にある茶山の旧跡は、訪ねようと思えば行けるところにある。詩中の「山」は馴染みのある中国山地の丸みを帯びた山並みである。

日本の農村の冬を思い浮かべる。「晴耕雨読」というが、やはり何かと心騒ぐ感じの他の季節とは違って、冬は農閑期、雪の中訪れる人もない夜の穏やかな一人の時間、それはまさに至福の時間に違いあるまい。山懐に抱かれたそうしかつての暮らしに思いを馳せて欲しいと考えた。

また、本を読むことが少なくなったと言われる今の高校生に、読書、思索の楽しみを再認識してほしいとも考えた。

学習目標

1. 日本人の中に漢詩を作る文化があったことを知る。
2. 冬の夜、読書に没頭できる喜びを読み取る。
3. 情景を思い描きながら、漢詩のリズムに即して音読することができる。

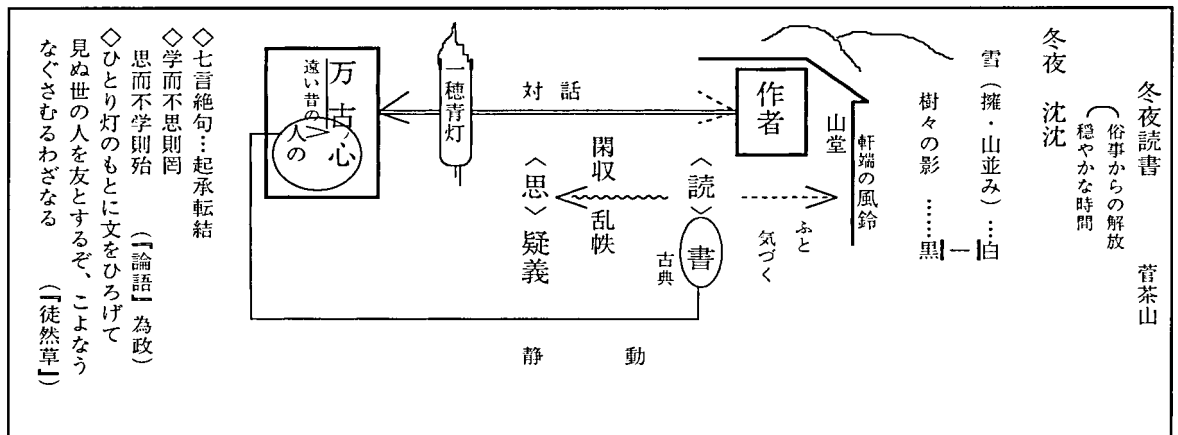
学習指導案

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1. 本時の学習目標を知る。 2. 詩の構成を理解する。 (1) 転句から、作者の姿を読む。 ① 作者は何をしているのか。また、何をしていたのか。 ② 作者が気づいたのはどのようなことか。 (2) 前半2句を中心に情景を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・菅茶山「冬夜読書」を読むことを伝える。 ・指名読み。各自読み。・詩形の確認。 ・作者の姿が述べられているのは転句であることを確認させる。 ・「乱帙」の説明。「帙」の実物も見せる。 ・茶山像の拡大図を貼り、読書時の姿や灯りを想像させる。 ・前半2句とのつながりに気づかせる。 ・菅茶山が日本人で、神辺在住であったことを知らせ、情景をできるだけ具体的にイメージするよう促す。

- ① 季節，場所，時間等を考える。
- ② 作者の姿を加えた詩全体の情景をイメージする。
3. 作者の心情を読み取る。
 - (1) 心の動きを追う。
 - (2) どのような書物を読んでいたのか考える。
 - (3) 作者の満たされた心境を結句を中心に読み取る。
4. 本時のまとめと次時の予告

- ・「擁」「夜沈々」 ・音読。
- ・前半で描き出される白黒のコントラスト，後半で浮かび上がる灯火の場面を一続きの情景としてとらえさせる。
- ・「読書」→(状況)→(閑収)→「思」→(青灯)→「万古心」
- ・大枠の把握でよい。
- ・「思疑義」「万古心」に注目させる。
- ・参考に「学而不思則罔。思而不学則殆」
- ・詩題，前半もあわせて考えさせるとともに，作者の暮らしを想像させる。ただし，個人に立ち入らないように留意する。
- ・「徒然草」の一節を簡単に紹介する。・一斉音読。
- ・生徒自身にとっての読書を振り返らせるとともに，時間があれば，日本人である作者にとって漢詩で表現する意味を考えてさせてみたい。
- ・次時は，子規の詩を読むことを知らせる。

板書



(授業者：岡本)

【実践2】

日時 2006(平成18)年11月28日(火)2時間目
 対象 広島大学附属高等学校Ⅱ年5組
 (男子22名 女子17名 計39名)

教材観

今年度高校二年生で日本漢詩を三首読む計画を立てた。菅原道真「不出門」、管茶山「冬夜読書」、正岡子規「送夏目漱石之伊予」である。教科書所収の三首であるが、日本人の漢詩にとって期を画する作品である。道真の詩は中国の模倣を脱した宣言とも読めるし、茶山のそれは日本的な情趣が自然と現れた稀有な例とも読み取れる。日本漢詩にとって中国の模倣からの離脱と独自性の確立は大きな問題であった。そして江戸後期に至り、日本人と漢文・漢詩の関係は大きく変わることになる。その象徴的な人物の一人が管茶山であった。また、現在の私たちが江戸時代の文学状況について抱いている常識についても中村真一郎氏は次のように指摘している。

…端的に言うと、江戸時代の人々の文学的営みの中心にあったのは、浄瑠璃でも俳諧でも、またあの歴大な随筆類でもなく、実に漢文による著述だったのである。

江戸人にとって、最大の思想家は宣長よりも徂徠だったろうし、詩人は芭蕉よりも茶山だったかもしれない。散文家としての名声は山陽が遥か馬琴を上まっていたのである。… (『江戸漢詩』)

明治以降の欧化政策によって忘れ去られてしまったこれら文学的な営みをもう一度思い返すことは無駄ではない。なぜならば、日本の文化は外国の文化を吸収し、それらをアレンジすることによって、日本的なものを作り上げ、表現してきた蓄積ともいえるからである。その象徴的詩人でもある管茶山を今回は読んでいく。

「冬夜読書」の世界は茶山の住んでいた備後神辺の情景を描く前二句と作者の心情を描く後二句からなる。冬の夜の読書。生徒たちにとっても身近な行為であるが、この詩で描き出される心情は生徒の想像を超えた

ものだろう。生徒たちにとって読書というありふれたことばの持つ深さをこの詩から読み取るとき、生徒たち自身の読書を振り返る契機にもなるだろう。

学習目標

1. 日本漢詩独自の情景描写を読み取る。
2. 詩のことばに注目し、詩人の心情に迫る。
3. 音読が作詩の迫体験となることを感じ取る。

学習指導案

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<p>1. 本時の学習目標を知る。</p> <p>2. 詩の構成を理解する。 (1) 転句から、詩の構造を読む。 「閑」に着目させる。詩中で「閑」なる存在はなにか。 (2) 情景を読み取る。</p> <p>3. 作者の心情を読み取る。 (1) 「閑」「思」に着目させる。 (2) 「思疑義」と「万古心」の関係を考えさせる。</p> <p>4. 本時のまとめと次時の予告</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・菅茶山「冬夜読書」を読むことを伝える。 ・指名読み。各自読み。 ・詩形の確認。 ・直接的には作者の姿であり、作者を取り巻く世界もまた「閑」に連なることをとらえさせる。 ・雪の夜、風はない。月は。具体的に情景をことばによって説明させる。これは、作者の住んでいる神辺の冬の夜の情景であることを伝える。備後の田舎の光景。 ・「閑」が情景とも結びついているを指摘させる。 ・「思」について、「学而不思則罔。思而不学則殆」（『論語』）を思い出させ、「思疑義」の行為が自らの力による深い思索を意味していることを考えさせる。 ・どのような書物を読んでいたのか想像させることによって、導く。 ・儒者である菅茶山にとって読書という行為が喜びであり、その喜びは万古の心につながることでもあることを確認させる。そして生徒たちにとっても、読書がまだ見ぬ人との出会いであるという意味において茶山と同じであることを気づかせる。（『徒然草』を引く） ・次時は、子規の詩を読むことを知らせる。

板書

2. 1. 詩型：七言絶句
押韻：深・沈・心

語

一穂青灯
眼前の一穂の
青いともしび

万古心
はるか昔の
古人の心

← そうすると

自分で考える

a 読書 → 結果 → b 思疑義 → 先生から教わる

学

冬夜読書

山堂に茶山はいる。

菅茶山

雪
樹影深
檐鈴不動
（風がない）

夜沈沈

静かにふけていく

一穂

青い炎

心情 — 閑 — 情景

(授業者：朝倉)

2) 正岡子規「送夏目漱石之伊予」詩の場合

(「高等学校古典漢文編」第一学習社 による)

【実践1】(於 国語科月例研究授業)

日 時 2006年11月30日(木) 第2限

学年・組 高等学校II年5組 39名

(男子22名, 女子17名)

教材観

子規の俳句や短歌は中・高生にもよく知られており、『墨汁一滴』『仰臥漫録』や死の二日前まで書かれた『病牀六尺』などの随筆を能くした人であることも知識としては知っているであろう。しかし、その原点が漢詩であると知っている人は少ない。子規は12歳で第一作の漢詩を詠んでいる。(「聞子規」)

幼少時から漢詩文の教育を受けた子規は、漱石との交友においても、互いに漢詩文を通して、敬愛の情を深めている。たとえば漱石は、

…けれども詩になると彼は僕より沢山作つて居り平仄も沢山知つて居る。僕のは整はんが、彼のは整つて居る。漢文は僕の方に自信があつたが、詩は彼の方が旨かつた。(談話「正岡子規『ホトトギス』」)

と子規の漢詩の力を高く評価している。

このような漱石との交際は、「十二月三十一日夏目漱石来」(五律)、「漱石」(七絶)の漢詩や「漱石が来て虚子が来て大三十日」の句にも描かれており、互いに尊敬し、詩文に置いては切磋琢磨する姿が浮かび上がる。

る。

1895(明治28)年4月、漱石は松山中学に赴任する。同年12月下旬に一旦帰京し、中根鏡子と見合いで結婚。31日子規を訪れる。翌年1月10日松山へ帰ることになった漱石に贈った詩が「送夏目漱石之伊予」である。

「子規は、あたかも出征兵士を送るような悲愴を胸に秘め、しかも強い口調で餞している。」この詩には、友への激励と孤独、その苦勞を思いやる暖かさ、そして再会への期待が五律で表現されている。漱石はこの詩に対し1月12日の端書に次韻の詩と俳句を返している。そこには敬意と友情がこめられている。

漢詩はこのとき自分の気持ちを相手に伝える大きな手段として存在している。生徒たちには明治期の日本人が相手を思い慕い気遣う心を漢詩によって表現していたということをまず知ってほしい。次にその詩を味わってほしい。そして漱石が返した次韻の詩の存在を知り、読むことで子規と漱石の友情と敬慕の念の深さに気づくであろう。自分だったら友人から送られたことばにどう答えるのか想像してみるのも楽しい。生徒の想像力を刺激する日本漢詩の魅力がこの詩にはある。

学習目標

- 1 旅立つ友を送る詩人の心情を理解する。
- 2 子規と漱石の友情が漢詩によって表現されていることを知る。
- 3 律詩の構成と対句等による表現効果を理解する。

学習指導案

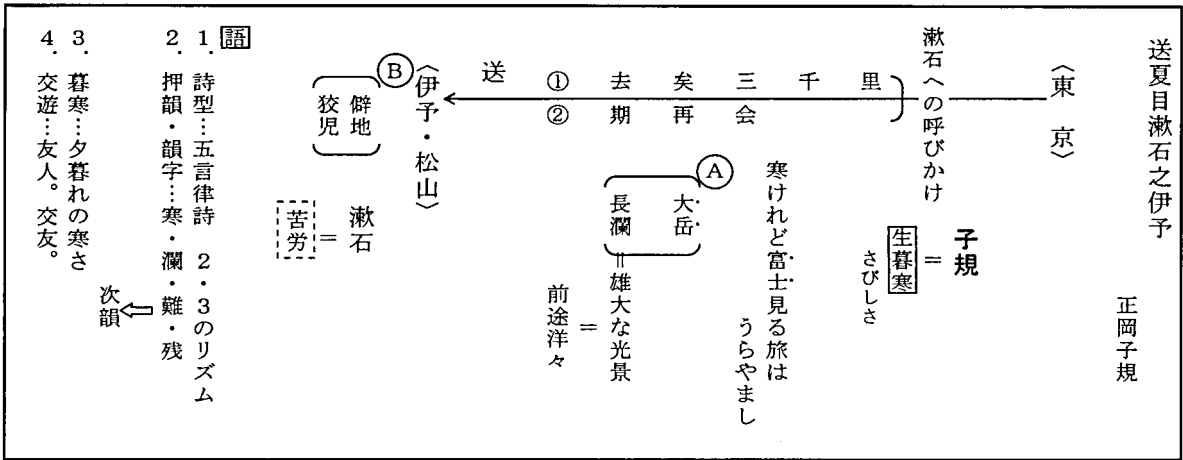
学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1. 本時の学習目標を明らかにする。	・ 漱石を送る子規の心情を理解する。
2. 詩の構成を理解する。 (1) 詩型, 押韻, 対句の確認。	・ 子規について問う。簡単でよい。 ・ 「寒・瀾・難・残」上平十四寒(10への布石) ・ 子規が伊予に赴任する友人漱石に与えた詩。漱石はそれまで高等師範学校に勤めていた。 ・ 自分の心情を伝えるのに、ふさわしい形式。君たちだったら、どうか。 ・ 「生暮寒」夕暮れの寒さ。友人を送る寂しさ。杜甫の「暮寒」詩を踏まえる。
3 作者の心情を理解する。 (1) 情景を読み取る。 (2) 作者から漱石への思いを読み取る。 (3) 詩の特徴を考えさせる。 (4) 尾聯に記された作者の思いを読みとる。	・ 雄大な自然描写。前途洋々たる未来の希望。 大岳は富士山。長瀾は瀬戸内海のむこうに起こる巨大な波。 ・ 漱石を送る子規の心情がもっとも表れている部分はどこか指摘させる。 ・ 友人へ呼びかける口調に注目させる。「去けよ三千里」「後るる莫かれ」

4. まとめ

子規から送られた詩と漱石の返した詩との共通点を考える。

- ・友人から送られた詩に君たちだったらどう答えるか、問う。
- ・この詩に答えた漱石の詩が次韻の詩であることに気づかせる。

板書



(授業者：朝倉)

【実践2】

日時 2006(平成18)年12月12日(火)6時間目

対象 広島大学附属高等学校Ⅱ年2組

(男子22名 女子19名 計41名)

教材観

この詩は、1999年にも研究授業を行っている。^{注4}その折の教材観は、…漢文が国語の一部であることを明確に示すような作品を読むことで、漢文が最近まで日本文化の根幹にあったことを知り、文化の大きな流れの中で自分との接点を発見すれば、作品への興味のみならず、自己の存在にも思いが及ぶのではないか。その点、この詩は、比較的近い時代の日本人の作品であり、子規も漱石も学習者にとっても既知の名前である。また「こころ」は高2の定番教材でもある。

現代文で接する人物が漢詩を作っていたこと、それが生活に根ざしていたこと、漢籍が典故として生かされていることを主眼にしたい。加えて、同趣旨の俳句もある。日本文学としての漢詩から源流に遡ることで、豊かな漢文の世界に至る、その接点に位置づけたいと考えている。…というものであった。

今回も趣旨は大きく変わっていないが、前回の反省

をふまえていくらか変更した部分がある。

まず、前回冒頭で扱った俳句は、子規の状況を理解するための補助資料とするに止めた。

次に、読解の中心を、再会を待つ心情よりも、漱石への激励に置いた。前回の、何となく湿った印象という声を受けて、詩の若々しさを表に出したいと考えたからである。特に、赴任先での労苦を案じる調子が、『莊子』の典故によって、力強さに一転する、その妙を感じさせたい。それこそが、日本文化に根付いた漢文を実感させることにつながるのではなからうか。

かつての日本人が漢詩を自家薬籠中のものとしていた、その一端を感じさせたいものである。

学習目標

1. 漢詩を通じて交わされた子規と漱石の交流の一端を知る。
2. かつての日本人が、漢詩の形式や漢文の知識を表現に生かしていたことに関心をもつ。
3. 詩の構成や心情を思い描きながら、音読することができる。

学習指導案

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1. 本時の学習目標を知る。 2. 詩の構成、状況を理解する。 (1) 詩題を読み、状況を理解する。	・正岡子規「送夏目漱石之伊予」を読むことを伝える。 ・指名読み。各自読み。

- ① どこで、誰が、誰を、どこへと送り出すのか。
- ② 詩形と対句を確認する。
- ③ 詩全体の構成を把握する。

3. 内容を読解する。

(1) 前半から子規の心情を読み取る。

- ① 「大岳」「長瀾」は具体的に何を指しているか考える。
- ② 「生暮寒」心情を考える。

(2) 後半を読解する。

- ① 松山でのどのような生活を想像しているのか考える。
- ② 作者は自らの故郷にどのような思いを抱いていたのか想像する。

4. 作者の心情を考える。

(1) 展開をふまえて作者はどのような心情を述べているか。

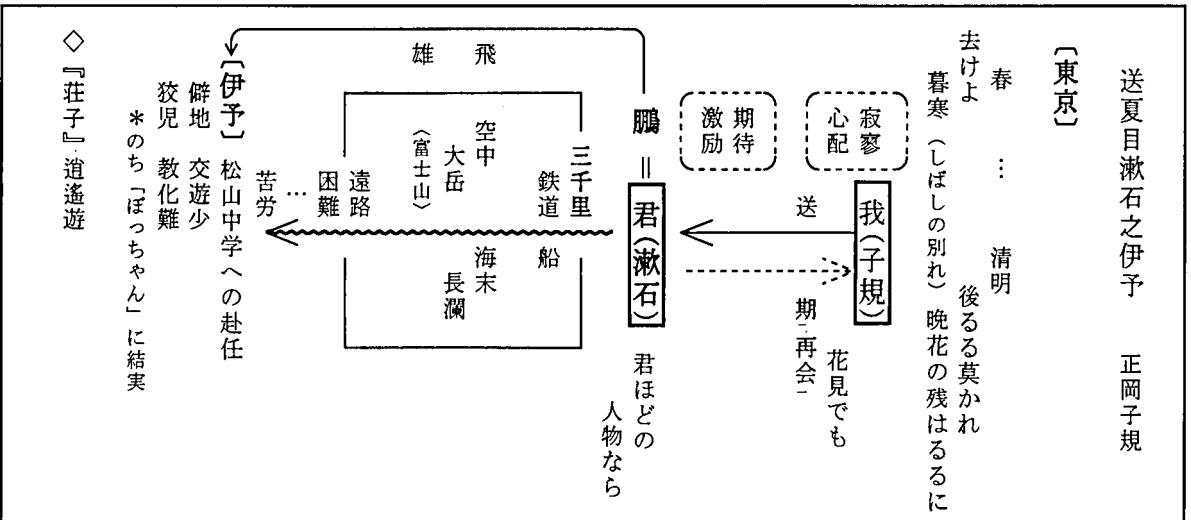
(2) 『莊子』との関連から、作者の心情を捉え直す。

5. 本時のまとめを行う。

- (1) 両者の関係を考え、心情をまとめる。
- (2) 日本人が漢詩を作っていたことをどう思うか、意見を交換する。
- (3) 心情を考えながら音読する。

- ・「伊予」はどこか。
- ・二人について知っていることはないか。
- ・五言律詩。頷聯、頸聯が対句であること、対句は切り離さずに読むことを確認させる。
- ・各聯はそれぞれどの場所、どの時点のことか。
- ・当時の旅について、現代との違いを含めて知らせる。
- ・日本の情景なので、できるだけ生徒自身に考えさせる。
- ・季節、時間はいつか。
- ・寂しさ、旅の身を案じる気持ちをおさえさせる。
- ・漱石は松山の中学に赴任するのであることを確認する。生徒は『ぼっちゃん』を連想するであろう。
- ・自らの故郷であることを確認し、その思いを想像させる。
- ・「花見」の楽しみを想起させる。・「残」のここでの意味。
- ・冒頭と末尾の命令形に注目し、何を呼びかけているのか考えさせるとともに、その呼応から全体をふまえて整理させる。
- ・寂しさの背景にある子規の病気について軽く触れる。
- ・漱石を鵬に擬していることに気づかせるとともに、全体を読み直させ、漱石の雄飛を言祝ぐ気持ちに気づかせる。
- ・二人の親密さ、そこでの漢詩は儀礼的なものではなかったこと等、ここでの漢詩の意義に思いを至らせる。
- ・時間がなければ、省略。
- ・心情や構成を考えながら音読するよう指示する。

板書



(授業者：岡本)

3. 考察

以上の授業実践について、個々の反省や課題は別に譲るとして、期せずして一致した点を軸に整理したい。

第一に、授業のねらいとして、かつての日本人が自己の、あるいは互いの精神生活に不可欠の一つの表現形式として日本漢詩で心情を吐露し、交友していたことに気づかせようとしたことがある。結果として、そのねらいは適切であったのではないだろうか。

生徒は幾分か、あるいは大いなる驚きを持ってそれを受け止めており、彼らにとって一つの発見であったようだ。ただ、そのためには、生徒と作品の壁を低くする必要はある。

たとえば、今回の漱石と子規という組み合わせはたしかに生徒の興味を引いた。作品選択、扱い、さらに岡本の「冬夜読書」で「擁」字へのアプローチから明らかになったように、生徒の持つ漢語・漢字の語感と詩語としての働きを繋ぐ工夫が必要になる。

第二に、板書でも明らかのように、これまで積み上げてきた漢詩の授業実践と軌を同じくする方向で、日本漢詩の授業も成立するということである。

語釈・解釈を突き抜けた授業のあり方を模索してきた中で、詩の構造を読み解く実践を積み重ねてきた。結果として、作者の心情に辿り着く学習の場として板書をとらえ、その板書に共通点が少なくない。試行錯誤で各自が練った板書の大枠が似ているという事実の示唆するところは少なくないと考えられる。

とはいえ、視点の当て方、授業への切り込み、授業展開はやはり各自のものであり、たとえば、押韻の扱いなど全く異なるものもある。朝倉は、かつての日本人も中国の漢詩の韻律に則って創っていたことをふまえ、押韻についても触れた。岡本は、当時すでに訓読主体で創り、味わっていたであろうと考え、押韻の指導は省いた。このような違いは、日本漢詩をどう考え、どう扱うかという点で不可避の課題であり、今後さらに検討が必要であろう。

第三に、他の表現形式との関連についてである。

朝倉は子規の俳句と合わせて扱った。「大岳」と「富士」を板書で重ねることで、生徒の知っている富士山と重ねたのである。岡本は実は、子規のその句と、漱石の「東風や吹く待つとし聞かば今帰り来ん」とを合わせて示す用意をしていたが、前回の実践と生徒の様子から割愛した。他方、菅茶山にも、冬夜の読書を詠じたものは見つからなかったものの、多くの和歌がある。テーマによって表現形式を選んでいた節も見受けられるが、このように多様な表現形式をかつてのらびとが持っていたことを知るといって自体にも意味があるのではないだろうか。

ただし、俳句や和歌についてもやはり生徒との距離を感じる。空前の俳句ブームとも聞くが、彼らの暮らしに根付いているとは言い難い。「声に出す」云々が言われるのもこの辺に起因しているものであろうか。

いずれにせよ、こうした、他の表現形式との関連をどう考えるかは、日本文化の広がりを感じさせることも合わせて、今後の課題と言えるだろう。日本漢詩が占めていた作者の生活の中での位置、またそれを享受してきた日本人の精神生活の中で占める位置は時代とともに変化しており、それを学習する生徒たちにとっても、作品をどうとらえるかという点に、大きく関係するからである。

今回は研究授業ということで、協議会で様々なご意見、ご質問をいただいた。

- ・日本人は漢詩・漢文とどう向き合ってきたのか。
- ・高校生にとって日本漢詩を学習する意義は何か。
- ・中国人の漢詩と日本漢詩は違うようだが、日本漢詩の授業を行う際、どのような工夫や配慮が必要か。等々、大きな課題もある。

一度消えようとした教材の再登場に当たっては、改めてその現代的意義の問い直しが必要であろう。模索は始まったばかりである。ただ、今回の実践を通して日本漢詩ならではの生徒の共感的理解は困難ではない、ということは明らかになったと思われる。「冬夜読書」の「一穂青灯万古心」では「万古心」に書物の中の古人を自然に連想したし、焦点化された情景は、彼らの脳裏に鮮やかな映像を結んだようだ。また、「送夏目漱石之伊予」詩は、二人の知識人同士の詩や友情のあり方を考える契機になったようでもある。

おわりに

ここ数年日本漢詩の教材化に取り組んで来た中で、見えてきたものがあるが、それを形として提案するにはさらに検証が必要である。同時に、日本漢詩教材の掘り起こしにも必要である。日本漢詩の享受には大きな断絶があり、指導する側にも十分な理解があるわけではない。

だからこそ、現代に必要な学習として日本漢詩を授業にどう位置づけるか、どのような教材をどのように扱うべきか、来年度に向けてさらに研鑽を重ねたいと考えている。

注1「現代に生きる中・高校生のための日本漢詩・日本漢文の教材化(1)」広島大学 学部・附属共同研究機構研究紀要(第34号)

注2『祖国とは国語』新潮文庫、2006年

注3『海棠花 子規漢詩と漱石』飯田利行、柏書房、1993年

注4『国語科研究紀要第30号』国語科研究授業211